

「くちなわ」とは何か？

西日本では古くから「蛇」のことを「くちなわ」と呼んでいた。語源は“朽ちた縄”と考えられている。

朝になると、太陽が差し込む場所で蛇が日向ぼっこをしているのを見かけることがある。変温動物である蛇は、活動性を高めるため、外気温をうまく利用して冷えきった身体を温める。

晴れた日、郊外を車で移動していると、路上で横たわる蛇を見かけることがある。それに気づけば避けて通り過ぎるが、気づかない場合は知らずに轢くことがある。まさか蛇が路上で横たわっているとは、普段は想像すらしない。仮に気づいたとしても、細長い小枝か縄紐が路上に落ちていた、程度の気づきであろう。車が普及する前であれば、路上を歩いていたとしても、木の枝か“朽ちた縄”程度の認識だったかもしれない。

本州・四国・九州地域にはニホンマムシ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシのほか、あまり知られていないヒバカリ、ジムグリ、シロマダラ、タカチホヘビの8種が分布する。

前号で紹介したニホンマムシは谷あいや田んぼのあぜ道など、比較的湿地域を好んで生活し、カエルやネズミ、ドジョウなどの小魚を好んで食べる。そのため、道路上を移動し横たわる姿を見かけることは少ない。むしろ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシの方が活動範囲も広いことから、路上を横断するときに体温を高めるため日向ぼっこをすることがある。体色もシマヘビの通常型は縦縞模様のため、束ねられた稲わらが路上に放置されているようなイメージになる。一方色彩と形状から、黒化型シマヘビやアオダイショウ、ヤマカガシは、朽ちた小枝が放置されているようなイメージとなる。おそらく、私たちが普段目にするこれら3種は、路上に動かずに横たわっておれば、木の枝か“朽ちた縄”程度の見た目だったと考える。

ちなみに、ヒバカリは既述4種と同じように、カエルやミミズ、小魚など多様な動物を捕食する「ジェネラリスト」であるが、あまり人目にはつくことはない。同様に見つけにくい蛇としては、ネズミ類を捕食するジムグリ、トカゲ類を捕食するシロマダラ、そしてミミズ類を捕食するタカチホヘビの「スペシャリスト」も生息するが、生息場所も比較的限られているため、人目にはつくことはほとんどない。

ただ、形状や体色が“朽ちた縄”に似ているからとの理由で「くちなわ」と名づけられたわけでは決していない。むしろ、「蛇＝毒蛇(ニホンマムシ)＝畏怖の対象」という認識が、古来よりあったのではないだろうか。前号で紹介したように、「夜刀神は角を持った想像上の蛇」だが、そのモデルだったのは畏怖の対象だったニホンマムシである。このことから、昔の人々はニホンマムシだけでなく、すべての蛇を畏怖の対象にしていた可能性が考えられる。それゆえ、「蛇」と直接的に口に出せない「忌詞いみことば」だったため、間接的表現として“朽ちた縄”と呼んだのではないかと考える。このようなことは、アイヌ語からも見出すことができる。アイヌの人たちは、「蛇」という直接的な表現は使わず、“長い神様”という意味の「タンネ・カムイ」と表現していた。「蛇」という言葉は、直接的表現で呼ぶにはあまりにも恐れ多いと考えられていたのであろう。

「くろぐつな」とは何か？

「くちなわ」「くちな」「くつな」という言葉は、近年まで関西地方では蛇の別称として使われてきた。そして、蛇のなかでも黒い蛇(黒蛇)を「くろぐつな」と呼んでいた。しかし今日では、全身が黒色であることから、“鳥のような黒色の蛇”すなわち「カラスヘビ」という表現が一般に広く使われるようになり、現在では研究者もその表現を採用している。

「くろぐつな」、すなわち黒蛇のほとんどはシマヘビの黒化型だと前号で述べたように、西日本とくに関西地方では、「くろぐつな」という蛇は、ほとんどが無毒の黒化型シマヘビ(写真)を指していると考えられる。



写真 開花中のサクラの小枝を移動する黒化型シマヘビ。天理大学研究棟周辺で撮影。

寺島良安が1712年に編纂した『和漢三才図会』(平凡社東洋文庫版)の「烏蛇」の項をみると、ルビに「うじゃ」「からすへび」とあり、別名として「黒花蛇」「烏稍蛇」と記載されている。そしてその『図会』には、寺島が小さい文字で「加良須久知奈波」と書き加えている。またその解説文の中では、明の李時珍が1596年にまとめた薬学書『本草綱目』の「烏蛇」の解説文が引用され、「身体は黒く光り、頭は円く尾は尖り、眼に赤光がある」、また「人にも害を与えない」と紹介されている。

寺島は、手本にした『三才図絵』(1609年、明の王圻おうきが編纂した百科事典)や『本草綱目』が中国で編纂されたことから、「烏蛇」は“鳥のような黒色の蛇”すなわち日本の「カラスヘビ」と同じと考えていた。あくまでも外見の体色と形態から「烏蛇」、「黒花蛇」、「烏稍蛇」と紹介したのである。大坂人の寺島は、日本(大坂)では蛇のことを「くちなわ」と称していたことから、『和漢三才図会』の解説のところに、小さく「加良須久知奈波」と書き加えたのではないだろうか。

寺島は、手本にした『三才図絵』(1609年、明の王圻おうきが編纂した百科事典)や『本草綱目』が中国で編纂されたことから、「烏蛇」は“鳥のような黒色の蛇”すなわち日本の「カラスヘビ」と同じと考えていた。あくまでも外見の体色と形態から「烏蛇」、「黒花蛇」、「烏稍蛇」と紹介したのである。大坂人の寺島は、日本(大坂)では蛇のことを「くちなわ」と称していたことから、『和漢三才図会』の解説のところに、小さく「加良須久知奈波」と書き加えたのではないだろうか。

いずれにおいても、日本固有種の通常型シマヘビの目の虹彩は赤いが、黒化型はほとんどの場合が黒い。『本草綱目』で紹介されているような、中国に分布する烏蛇の目は「赤光」であると記載されているのとは明らかに異なる。ただ、シマヘビと同じように、人に危害を加えないところは同じようである。

それでも日本では、今も「黒蛇には毒がある」との風評と先入観を持つ人が多く、ニホンマムシのように忌み嫌う人は多い。もちろん、ごく稀に毒蛇・ヤマカガシの黒化型が発見されることはあるが、その確率は非常に低い。

ちなみに、蛇は嫌われ畏怖の対象になるだけでなく、感謝の対象にもなっていた。天理市内にはシマヘビ等を“野神さん”として祭り、“ジャ”への感謝を込めた「野神祭り」が、市内の南六条町、平等坊町、岩室町、新泉町などに残されている。